# #1　ひなあられ

下界には桃の節句という女の子のためのお祭りがあって、ひなあられという、縁起物があるらしい。
食べてみたいなあと閻魔が言ったので早速買ってきた。
「うっそん。早！　いつの間に行って来たの昨日の今日で」
「買い物くらいさっと行ってぱっと帰ってこれるだろ。てことで今日は、これで」
ひなあられ、と可愛らしい字体で書かれた袋を破ると、ふんわりと、甘い砂糖の香りがした。
鬼男は閻魔にばれないようにこっそりと、白い一粒をつまんで前歯でかじった。
想像通り、甘かった。米の味がする。そういった菓子なのかもしれない。色は白を基本として、時たま淡い緑や桃色なんかが混ざっている。
砂糖蜜をまぶされた黒豆も混ざっていて、みな例外なく甘かった。
ざらざらと、小鉢に適当な量を出して渡してやると、閻魔は興味深そうにしげしげと眺めている。
鼻をうごめかせてにおいをかいだり、一粒二粒つまみあげて固さを確かめるように手のひらにころころ転がしたり。
飲み物は何がいいだろうかと、見慣れない、今風のパッケージではあるもののどうやら伝統的な和菓子だし、米であるならなおのこと、緑茶が無難でいいだろうかと。
鬼男が考えていたら突然、何を思ったか、ひなあられ一掴みを閻魔が部屋の何もないところに投げつけた。
「福は内ー」
「ばっかうわあ何してんだドアホー！！」
誰が掃除すると思ってんだ、と一瞬でそこまで考えて血相を変える鬼男にも第二波が浴びせられた。
気の抜けた、間延びした声が無邪気に菓子粒をまきちらす。
「鬼は外ー」
「バカヤローー！！」
怒号が、部屋ばかりでなく建物中を震わせた。

「だって先月まいた豆に似てたから」
「まいてない、断じてまいてない！　て言うか鬼で悪かったな出てくぞチクショウ」
「あ、止めてそれやめてオレひとりじゃ何もできない」
「しろ、しろよ！　一人でも！　何か、何かくらい！」
「ええー？　だあってそりゃまあ、やってできないことないけど？　オレ、閻魔大王ですし？　もちろんなんだってできますけど？」
「辞表の書き方教えてもらってもいいですかね」
「そのほうきとちりとりを貸したまえ鬼男君。オレが少しくらい何かくらいは出来ることを証明しよう。だからこの話はもう止めよう。きっと誰も幸せになれない」

ざっざっと乱舞するほうきに弾かれて、何粒かが部屋の隅に飛んでいくのを鬼男は見逃さなかった。指摘しようとして、口を開いてから閉じる。
閻魔があまりにも楽しそうにほうきを振り回すものだから、何となく、まあいいか、と思ってしまっただけだった。
覚えていたら、後で拾っておこう。
そうでなくても次の掃除できれいにできるだろう。
閻魔がノリノリでかき集めたあられは埃にまみれていて、どうすんですか、と鬼男が聞く前に窓の外に捨ててしまっていた。
「ああ、もったいない」
「大丈夫、きっと誰かが食べてくれるさ。鳥とかねずみとか」
「そうですかね」
「で、鬼男君。おかわりは」
「ないです」
「あ、そうなんだ。……え？」
「ないです」
「えっ！　な、なんで！？」
「いやここは逆に聞きたい、なんであると思ってんですか当たり前みたいに」
「だって、だってまだ残ってるだろう？」
「食べちゃいました」
「はあー？」
「大王が掃除している間に」

そういう鬼男の手には空の袋が握られていて、それは確かに、最初に閻魔の目の前で開けてみせたものだった。
あごが外れるんじゃないか、というほどに長いこと、口を開けて閻魔は鬼男を見つめている。
さすがにばつが悪くなってきて、誤魔化すように鬼男は小首をかしげて見せていた。
「美味しかったですよ？」
「か、感想はいらないよ！」
「お茶入れてきますね」
「わ、私のひなあられ……」
「投げちゃったじゃないですか、あんた自分で」
「私の……」
がっくりと、肩を落としてうなだれる様子はいかにも哀れで、ちくちくと、良心が刺激されないことも無いけど。
「食べ物で遊んじゃダメですよ」
ひどくもっともらしい言葉と、うざったくイスの上に膝を抱えて座る閻魔を残して、鬼男は台所に向かった。

しゅんしゅんとやかんが透明な熱をはいている。
ざらり、と小鉢にひなあられを盛って。
「ま、あるんだけどさ。たくさん買ってきたし」
季節もので、もしかしたらお祭りとやらは終わっていたのかもしれない。
ひなあられはセール品として安く、大量にワゴンに乗せ

られていた。下界ではよくあることだった。時期を過ぎると安価で出回るようになる。
「美味しさは変わらないのにな」
何円引き、と書かれたシールに爪を立てて、剥がしてしまった。ゴミ箱に放る。
急須にやかんの湯を注いで、たちまち葉の青い香りがあたりに立ち込める。

一つ二つならいいだろう。
閻魔大王のためによそったひなあられの、色つきの粒をつまんでかじってみる。
白いものと変わらない味のそれは、ただ見た目には鮮やかで楽しい。

さあ、何て言ってこれを渡そうか。
きっとまだ、イスの上、膝を抱えていじけている大王に。
「食べ物で遊ぶからだ、バーカ」
だからこうやって僕なんかに遊ばれてしまうんだ、と。
からからと、小さく笑う声がお茶のにおいに紛れた。

## #2　いちご大福

小豆をどっさりと買ってきた。多少値がはってもより色やつやがいいのを選んで、こういう時ばかりは、とびきりの贅沢を自分に許して。
台所に立ったのは、まだ朝の早いうちだった。食事の支度ではない、菓子を作るのだ、という思いは胸をくすぐったくさせた。そういう特別感を鬼男は嫌いではなかった。
腕まくりして流しに向かう。量った小豆を冷たい水で研いでいると、しゃんと背筋が伸びる気がする。
ゴミや傷がないか探しながら。艶めいた赤色がきれいに水を弾いて光るまで。
良く磨いた鍋を用意する。まずはざっと、たっぷりの水でゆでてしまう。沸いたら火からおろして水を流す。ちょろちょろと、細く、ゆっくりと冷やしていく。たっぷりと時間をかけて、焦らないように、慌てないように、自分に言い聞かせて。
いい子、いい子、と幻聴を聞いた気がする。それは幻ではなくて思い出であることを鬼男は知っている。いつだっただろう。いつだったか、そうやって労われた日がきっとあったのだ。
思えばあの時から、丁寧に、慎重に、と自分を律してきたような気もする。
なんにせよ遠い日のことだった。いつからかあの人は休